

は じ め に

令和6年度も残すところあとわずかとなりました。各学校におかれましては、校長先生のリーダーシップのもと、児童生徒の実態を踏まえて、様々な知恵を出し合いながら、「ワンチーム・チーム学校」として意識をあらためて共有し、教育課程の確かな実践により、充実した教育活動が展開されてきたことと思います。

児童生徒の学力の定着・向上に目を向けると「授業改善」を柱に据え、それぞれの学校が自校の「強みと弱み」を的確に分析し、成果の継続と課題克服に取り組んできています。その結果は、各種学力調査の検証によって明らかになっています。本年度に実施された諸調査の結果からも、学校間や学年及び教科によっては厳しい実態もあり、学力の定着・向上に課題が継続していることも事実です。

特に課題が継続している教科や問題の内容によっては、学校全体として共有を図り、日々の教科指導の中で意識して取り組んでいくことが求められます。

あわせて、「授業改善」を目指し教科指導の質的向上を図るうえで、重要になってくるのが「学級経営」です。学校訪問等の場で目にする光景の中で、子ども達の学びの姿からは、授業中の物言いや態度、心の構え的な面の「授業におけるマナーやモラル」といった点に少し気になる状況があることも否めません。

四万十市の子ども達が、真に自立し「確かな学力の定着と向上」が図れるよう、学校全体で目的意識を持ち、創意工夫された意欲的な取り組みが推進されることを願います。

さて、四万十市の今一つの大きな教育課題である「不登校問題」は、未然防止やその解消に向けて、様々な取り組みを進めてきていますが、不登校や不登校傾向の子ども(新規・継続も含めて)、さらには毎月3日以上の方欠児童生徒の数は依然として増加傾向にあります。

関係校においては、別室での支援や家庭訪問等を通して、個に応じた支援を行っています。さらに、ふれあい学級での通室生に対しても同様の支援を行うとともに、通室生の在籍校はもちろんのこと、各校の支援会での情報を共有し、関係機関とも連携しながら、可能な限りタイムリーな支援ができるよう努めています。

ただ、不登校等の要因は、複雑多岐にわたっており、特効薬があるわけではありません。そういった子ども達や保護者の困り感に寄り添いながら、「スモールステップ」を意識し、今後も学校・家庭・関係機関が連携を密にして、複眼で子ども達を支援していければと思っております。

結びに、本年度も1年間の歩みを振り返る「教育しまんと」が整いました。教育研究所並びに教育研究会の各種事業にご協力いただきましたことに心より感謝申し上げ、はじめの言葉といたします。

令和7年3月吉日

四万十市教育研究所
所 長 藤原 昭彦